

# 大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL：06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail：daimao@travelmitra.jp)

## インドの国旗と「美しい」日の丸 (1)

大阪のレトロな喫茶店（仮想空間）にて：

「なあ、なあ奥さん、ウチの二軒隣りのご主人から『美人や！』と言われたんよ！」

このおばちゃんは、三軒長屋（三国＝日本・漢土・天竺）に住んでいる、とにかく元気なお方である。

「それに引き換え、お隣のご主人、わたしがちょっとしゃべり過ぎたら、口もきいてくれへん。（ヒョウ柄の大坂の）奥さんどない思う？」

「あんたが美人やったら、ウチはもっと美人やわ！ お金かけて銭湯（Senjo）で肌（Tama）磨いてるで！」

これぐらいでダジャレと与太話はやめておこう。

わが国の首相が、モディ首相から「美しい妹」と呼ばれた、というニュースが流れた。ご本人も相当嬉しかったのであろう。それで、ここぞとばかり親密さをアピールしたが、「美しい」という形容詞に舞い上がったのか、「妹」という名詞に感激したのか、一体どちらだろうか。

ところが、それが誤訳であったことが判明した。モディ首相（ヒンディー語）⇒通訳1（英語）⇒通訳2（日本語）⇒わが国首相。モディ首相の「私の妹である高市首相＝my younger sister、little sister」が、どこでどう間違ったのか「私の美しい妹＝my beautiful sister」と通訳されてしまった。この些細な誤訳の責任は誰にあるか。通訳1か通訳2か。わが輩の見解だと、通訳者に責任はないと考える。同時通訳には集中力が必要である。瞬間的に適語を選ぶのは難しい。正直にいうと、わが輩など適当に通訳している。最近とみに記憶力が衰え日本語も思い出せない。もちろんわが国の首相が悪いというわけではない。

インド社会で「他人の奥さまに、美しいと言っていけない」と、注意を受けたのか、本で読んだのか定かではないが、漠然とした記憶が残っている。それでわが輩は「美しい奥さんですね」などと言ったことがない。それがマナーだと思っている。

このわが輩の記憶からして、モディ首相が他人の奥さまに「美しい」というはずがない、と思っている。慎重深いご婦人なら、たとえ「美しい妹」と言われたとしても、ご自分が「美しい」と、皆さんに公言しないものである。それが品格というものである。

どうして誤訳が生じたのか、友人のヒンディー語教師に聞いてみた。

meri chhoti bahan は「私の小さい姉妹＝私の妹」という意味です。インド人の感覚では、普通は姉に対しては「美しい」と言いますが、妹には「可愛い＝pyaarii」を使いますよ。

同じく、モディ首相と同じグジャラート州出身の友人に聞いてみた。

グジャラティー語で、私の妹は choti ben (妹) choti bhai (弟)、moti ben (姉) mota bhai (兄) と家族内で読んでいます。モディ首相が言うように、インドと日本はひとつの家族として、ben(妹)や bhai (兄) と親しみあるメッセージを述べたと思います。モディ首相はとてもスピーチがお上手だと思いました。

結局、誤訳の原因は分からなかった。分ったのは品性の差だけであった。モディ首相の略歴から、その差についてみてみよう。

2026 年 7 月 1 日高市早苗首相が訪印し、モディ首相と会談した。

テレビを観ていて、わが輩は思った。

(わが国首相は、どうして、あんなにニコニコするのだろうか・・・)

モディ首相は、にこりとしたが、にこにこしなかった。14 億人を率いる政治的指導者と、1 億 2000 万人の差だろうか、などと余計なことを思い浮かべた。

たしかに、人口・年齢からみればモディ首相は「兄」だが、それだけではない。モディは、いわゆるエリート層 (OBC 出身) でもなく、大学をでたわけでもない苦労人である。1967 年 17 歳とき 上高等学校 (higher secondary education) を修了した。駅でチャイを売っていたこともあった。1968 年 18 歳のころに慣習的に結婚したが、すぐに家をでてしまった。グジャラート州ラーゴコート of ラーマクリシュナ支部僧院に出家を二度願い出たが許可されなかった。僧団創始者ヴィヴェーカーナンダ師の思想 (不二元論) に影響を受けていた。ちなみに、わが輩はブルニマ旅団と一度この僧院を訪れたことがある。

それに対応したのが 1966 年に赴任してきた副主任のアートマスターナンダ師 (のちの第 15 代会長) であった。モディ首相は 2015 年 5 月 9 日会長アートマスターナンダ師の見舞いにコルカタの本部ベルールを訪れている。入団は叶わなかったが、師弟のような関係が継続していた。

モディは大学卒ではなく、また結婚歴があったので入団を拒まれた、とわが輩は推測している。もう一つの理由は、ヒンドゥー右派 RSS の活動に参加していたからではないか、とも思う。

わが国の右派首相と類似しているかとも思えるが、モディ首相には少なくともスピリチャリティなるものへの憧憬があった。その点において、品性に大きな差がある、とわが輩は思う。

モディ首相と親交のあったアートマスターナンダ師とは、どのようなお方であったのだろうか。師の一族によると、修業や日常生活に関しては大変厳しいお方であった、とのことである。

アートマスターナンダ師は日本を訪れたことがある。しかも一族に日本女性も加わっている。

師の一族は、英植民地政府によるベンガル分割令 (1905 年) 以降に、ディナージプル (現バングラデシュ) から、ムルシダバード (コルカタ北 180 キロ) に移住してきた。ベンガルの忘我の聖者チャイタニヤ・マハープラブ (1485-1533) につらなる学者の家系であった。チャイタニヤは、神の権化クリシュナと恋人ラーダーを崇拝し、歌い踊ながら行進するバクティ (信愛) 信仰で、その名が知られている。

師の父親 (パタチャールジョ、Bhattacharya) は、ディナージプル王家に仕えていたサンスクリットの学者であった。妻が世俗の一切を仕切り、父はいつも瞑想とジャパ (念誦)、聖典の読誦だけに専念していた。息子が大病で苦しんでいるときでも、父は聖典に夢中であったという逸話が残っている。

この一族は父の影響を受け、三人の息子と娘が出家者になった。また、結婚したもう一人の息子も、家族 (妻と長男) を離れベナレスの僧院で居士として生涯を終えた。

彼らにとって、世俗の価値は何の意味ももたなかった。世俗は神のイリュージョン (遊戯) に過ぎないからである。

モディ首相にも、この思想が基底としてあったとわが輩は深読みしている。次回は、わが国の首相の基底にある思想とは何か、を「国旗損壊罪」から覗いてみよう。